

教育思想史学会

第 33 回大会プログラム

2023 年 9 月 15 日(金) 《理事会・編集委員会合同会議》 16:00～18:00

9 月 16 日(土) 《会場受付》 8:30～17:30

9 月 17 日(日) 《会場受付》 8:30～18:00

対面会場：同志社大学
今出川校地「新町キャンパス」じんしんかん 尋真館
+
オンライン (Zoom)





【大会参加費】

	一般	大学院生
会員	2,000 円	1,000 円
非会員	2,000 円	2,000 円
※大学学部生以下は無料です		

【懇親会費】

	一般	大学院生以下
会員・非会員とも	5,000 円	3,000 円

【参加方法】

会場校における対面参加、Zoom によるオンライン参加にかかわらず、大会参加費を 9/8 (金) まで にお振込みのうえ、**事前申込み**を行ってください。参加費の振込みを確認したのち、登録されたメールアドレスへ、大会サイト URL をお送りします。当日の Zoom リンクは、大会本番サイトのなかで公開いたします。

大学学部生・高校生の大会参加費は無料です。加えて、もし懇親会に参加を希望される場合は、指導教員・コロキウム企画者等の承認・監督を条件として（受付で確認させていただきます）ご参加いただけます。ただし、特に 20 歳未満の方の飲酒については厳にお慎みください。懇親会費は大学院生と同額です。

※会員のみなさまには、大会参加費用の振込用紙を送付します。非会員の方も**事前登録が必要**です。詳しくは大会プレサイトをご覧ください。

→教育思想史学会第 33 回大会プレサイト：<https://sites.google.com/view/hets-taikai-33-pre/>

※大学学部生以下の方は参加費振込みの必要はありません。申込み情報を記入するだけで結構です。

教育思想史学会第 33 回大会へのお誘い

教育思想史学会会長 西村拓生

今年も秋の大会のご案内をお送りする時期になりました。

京都の地下鉄でのマスクの着用率も少しずつ下がってきて、私たちは徐々に「日常」に戻りつつあるかのようにも見えます（もちろん、パンデミックで顕在化した問いを私たちは忘れてはなりません...）。今年の本学会の大会は、昨年が続いて同志社大学を会場に、基本的に対面で、しかし同時に、コロナ禍に対応したオンライン大会で拓かれた多様な参加のあり方を引き続き大切にすべく、ハイブリッド開催といたします。また、今年は（待望の？）懇親会も復活させるべく準備を進めております（どうか第9波が大きくなりませんように!）。

懇親会の話が先になってしまいましたが、今年の大会について特筆すべきは、フォーラム三本にシンポジウムという、少々欲張った構成としたことです。

フォーラムは、まず、第 19 回教育思想史学会奨励賞をダブル受賞された森田一尚会員、川上英明会員に、それぞれ、フロムにおける「啓蒙」の問題、京都学派教育学における形成的表現と政治的実践の「亀裂」というテーマで、受賞後のご研究の最前線を語っていただきます。さらに藤井佳世会員にご登壇いただき、ハーバーマスのコミュニケーション論に関する積年のご研究の成果を聴かせていただき、議論します。

シンポジウムのテーマは「近代仏教と教育」。大正新教育や京都学派を想起するだけでも、近代日本の教育の実践と思想に対する仏教の影響は計り知れないものがあります。本学会ではこれまで、眞壁宏幹会員と渡辺哲男会員を中心にこのテーマのコロキウムが継続的に企画されてきましたが、今回、それを全体のシンポジウムとして展開・深化させることをお願いしました。

プログラムの詳細をご覧いただければ明らかなように、これら四つのセッションのテーマは、巧まらずしていくつもの論点で交差し、響き合うものになっています。

コロキウムも六つ、いずれもこの学会らしいラディカルで魅力的な企画を出していただくことができました。

お送りするプログラムをご覧いただき、今年も多くの皆さまと、初秋の京都で、あるいはオンラインで、お目にかかり、多彩で闊達な議論ができることを願っております。

大会日程

【前日 9月15日 (金)】

16:00-18:00	理事会・編集委員会 合同会議 (会場：志高館 3階・SK330 教室) 対面+オンライン同時双方向型
-------------	-------------------------------------------------------

【第1日 9月16日 (土)】

8:30-	受付 (2階ホール)
9:00-11:30	コロキウム1 (会場：Z24 教室) 対面+オンライン同時双方向型 学校における遊びの思想史
	コロキウム2 (会場：Z26 教室) 対面+オンライン同時双方向型 教員養成における〈教育と科学〉 —19世紀独・英・仏をつなぐ教育思想史の試み—
11:30-13:00	昼食
13:00-14:45	フォーラム1 (会場：Z21 教室) 対面+オンライン同時双方向型 教育における「啓蒙」の行方 —フロイトからフロム、そして大拙へと至る思想史の検討を通じて—
15:00-16:45	フォーラム2 (会場：Z21 教室) 対面+オンライン同時双方向型 コミュニケーションと教育
17:00-17:45	総会・授賞式
18:00-20:00	懇親会 場所：Hamac de Paradis (アマーク・ド・パラディ) 室町キャンパス・寒梅館 1F 会費：一般 5000 円・大学院生以下 3000 円 ※参加費とともに事前払い込み

【第2日 9月17日(日)】

08:30-	受付 (2階ホール)
9:00-11:30	<p>コロキウム3 (会場: Z24 教室) 対面+オンライン同時双方向型</p> <p>大学初年次教育を問い直す</p> <p>—ポスト・コロナにおけるアセンブリとエージェンシーの可能性—</p>
	<p>コロキウム4 (会場: Z26 教室) 対面+オンライン同時双方向型</p> <p>記憶の空間を生きる</p> <p>—「二重のまち」から考える再表象の実践—</p>
	<p>コロキウム5 (会場: Z28 教室) 対面形式</p> <p>教育実践をめぐる「遊び」概念の検討</p> <p>—教育実践における造形遊び・体育科ダンス・ビデオゲームの思想に触れる—</p>
	<p>コロキウム6 (会場: Z29 教室) 対面+オンライン同時双方向型</p> <p>資本主義でも社会主義でもない社会構想と教育</p> <p>—シュタイナー「社会有機体三分節化」論のインパクト—</p>
11:30-13:00	昼食
13:00-14:45	<p>フォーラム3 (会場: Z21 教室) 対面+オンライン同時双方向型</p> <p>京都学派教育学の〈亀裂〉</p> <p>—木村素衛と森昭、あるいは形式的表現と政治的実践の対立の根底—</p>
15:00-18:00	<p>シンポジウム (会場: Z21 教室) 対面+オンライン同時双方向型</p> <p>近代仏教と教育</p> <p>—信仰・修養・教養—</p>

会場案内図

【アクセス】地下鉄烏丸線「今出川」駅から徒歩10分
(最寄り：2番出入口)
京阪電車「出町柳」駅から徒歩25分
バス停「上京区総合庁舎前」から徒歩3分



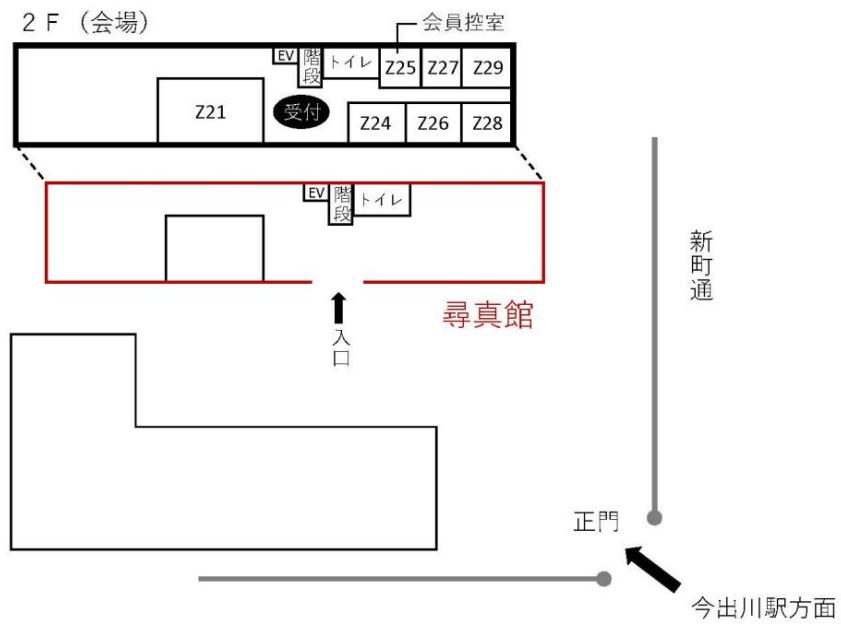
↑会場・尋真館外観



懇親会会場・寒梅館外観→
(1階アマーク・ド・パラディ)



↑ 地下鉄今出川駅から新町キャンパスへ



↑ 館内教室配置

9月16日（土）

コロキウム1 9:00-11:30 Z24 教室
（ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型）

学校における遊びの思想史

企画者：古屋 恵太（東京学芸大学）

司会者：渡辺 哲男（立教大学）

報告者：古屋 恵太（東京学芸大学）

清家 颯（東京学芸大学）

指定討論者：西村 拓生（立命館大学）

遊び一般ではなく、学校のなかに位置づけられた遊びを思想的に考察するというのが本コロキウムの目的である。本コロキウムでは、この目的を達成するのに最適だと思われる二つの事例を取り上げる。一つは近代のもので、遊び (play) と仕事 (work) の連続性を説いたジョン・デューイの中期思想である。報告者である古屋恵太（東京学芸大学）は、フレーベル及びアメリカのフレーベル派とデューイとの関係を再考し、遊びと仕事から成る occupation を、当時の思想的文脈のもとで「原初的作業」として読み直す。

もう一つは現代のもので、1977年告示の学習指導要領で小学校図画工作科に「造形的な遊び」という名称で登場して以来、今日にいたるまで様々な変遷、議論の蓄積を経てきた「造形遊び」である。報告者である清家颯（東京学芸大学）は、こうした変遷と蓄積が当時の美術教育の思想と実践を文脈とするとともに、1980年代に生じたニューアカデミズム、現代思想の流行、当時の社会構造改革をも思想的文脈としていたことを論じる。そのことは、現在には現在の新たな文脈があり、「造形遊び」の相貌に変化が生じていることを示唆することにもなる。以上二つの報告に対して、指定討論者である西村拓生会員（立命館大学）からのコメントを受け、学校における遊び、ひいては教育について、今後の展望を参加者と議論したい。

教員養成における〈教育と科学〉

——19世紀独・英・仏をつなぐ教育思想史の試み——

企画者・司会者：岸本 智典（鶴見大学）

報告者：小山 裕樹（聖心女子大学）

高宮 正貴（大阪体育大学）

吉野 敦（大分大学）

教員にとって必須の知を問う議論において出現する〈教育と科学〉の関係という問題圏を主軸に19世紀の独・英・仏でそれぞれなされた教育（思想）史論を検討することで新たな教育思想史の姿が見えてこないか。こうした期待のもと本コロキウムではまず、19世紀前半に「学問-科学〔Wissenschaft〕」としての「教育学」を構想したヘルバルトの教員養成論に関して近年の研究を踏まえて再検討しつつ、19世紀後半のヘルバルト派のそれへと至る道筋で「学問-科学」理解がどのように展開し得たのか、主にドイツを中心としながら考察を開始する。次いで扱われる19世紀後半の英国では、教師になるためには、教科に関する専門的知識だけでなく、教育そのものに関する学問が求められるようになった。そうした趨勢の中で、スコットランドの哲学者アレキサンダー・ベインが「科学」としての教育をどのように捉えたのかを、ハーバート・スペンサーと対照させつつ検討する。最後に、19世紀末のフランスにおけるベインやスペンサー、ヘルバルトらの紹介者という一面をもつ教育思想史家ガブリエル・コンペレに注目したい。教員養成用教科書として執筆された『ペダゴジーの歴史』におけるスペンサーとベインの位置づけの検討を通して、彼が提示する「教育科学」のあり方を考察する。以上の19世紀に展開した〈教育と科学〉の関係をめぐる諸論の検討を通じて、われわれの時代の教育思想史の姿を反省的に思い描きたい。

教育における「啓蒙」の行方

——フロイトからフロム、そして大拙へと至る思想史の検討を通じて——

報告者：森田 一尚 (大阪樟蔭女子大学)

司会者：関根 宏朗 (明治大学)

啓蒙が野蛮化する事態に直面してもなお、教育が啓蒙的な営みの一端であらざるをえないのだとしたら、私たちは啓蒙の運動にどのように向き合えばよいのか。本発表では、精神分析に潜む啓蒙の問題に独自の仕方であてたエーリッヒ・フロム (1900-1980) の観点に着目し、彼のフロイト論と鈴木大拙論を再検討することを通じて、上述の問いに答えるための手がかりを探ってみたい。

ユダヤ人であったフロムが生きた時代、啓蒙の運動は一つの極限に達した。ナチスを逃れてアメリカに亡命したフロムは、1930年代後半には、それまで協働していたホルクハイマーと袂を分かつことになったといわれている。しかし、アドルノとホルクハイマーが後に剔出した「啓蒙」にまつわる諸問題は、精神分析家フロムにとっても無視することのできない重要な課題であったはずである。

フロムはフロイトを、「啓蒙期合理主義の偉大なる最後の代表者であり、その限界を証明した最初の人」と評しつつ、フロイトの精神分析を「修正／刷新 (revision)」することに力を注いだ。「修正／刷新」の作業は、1950年代から禅の宗教家である鈴木大拙の著作にふれることで前進し、とくに東洋的な啓蒙 (eastern enlightenment)、つまり日本語で悟りと呼ばれる思想や境地に関心を抱くなかで発展していった。このことから、フロムの頭の中にあつた思想地図には、啓蒙主義から東洋的な啓蒙 (悟り) へと至る入り組んだ道が、おぼろげにでも描かれていたと考えられる。

フロムは啓蒙の問題をどのように処理しようとしたのか。本発表では、この問いに取り組むことによって啓蒙と教育の関連について一つの見立てを提示し、さらにその見立てに基づいて、現代日本におけるいくつかの教育学思潮の展開を追う予定である。

フォーラム 2 15:00-16:45 Z21 教室

(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

コミュニケーションと教育

報告者：藤井 佳世（横浜国立大学）

司会者：野平 慎二（愛知教育大学）

コミュニケーションにおける相互作用に着目した思想家の一人として、ユルゲン・ハーバーマスを挙げることができる。ハーバーマスは、フランクフルト学派第二世代の社会哲学者である。若い頃アドルノの助手を務め、アーベントロートに教授資格論文を提出し、ハイデルベルク大学、フランクフルト大学を経て、マックスプランク研究所の所長を務め、再びフランクフルト大学教授に就任した。その間、理論的内容は変遷を遂げるが、初期の頃から一貫してコミュニケーションや意思疎通の重要性を論じてきた。その理論は、ドイツにおける批判的教育科学（解放的教育学）の興隆を促し、解放と教育の議論を深め、教育改革期における教育実践に変化をもたらすなど、教育/教育学へ影響を与えた。ハーバーマス自身、教育に関する論考の中で民主化とコミュニケーションを重視する考えを説いていた。

ハーバーマスが長きに渡って取り組んだコミュニケーション論の再構成を通して見えてくることは、主体形成と社会批判を結びつけようとする思想である。主体形成は、第一世代と同様、人間の成熟や自律を中心に据えており、政治的主体に関する理論といえる。特に、ハーバーマスは主体形成をコミュニケーションから説明し直すことによって、社会批判とつなげている。社会批判について、ハーバーマスは、ホルクハイマーとアドルノによる『啓蒙の弁証法』における社会批判の理論枠組みに関して、現状の問題を指摘し続けることしかできないため十分な批判性を持ち得なかったと捉えた。それゆえ、ハーバーマスが提案したのは、生活世界と結びつくコミュニケーションや討議である。

本報告では、戦後ドイツにおける批判理論を主体形成と社会批判の思想として捉え、ハーバーマスとその後焦点を絞り、コミュニケーションにおける相互作用を軸にすえることから現れ出る教育について考えみたい。

9月17日(日)

コロキウム3 9:00-11:30 Z24 教室
(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

大学初年次教育を問い直す

——ポスト・コロナにおけるアセンブリとエージェンシーの可能性——

企画・司会：田中 智輝（山口大学）

報告1：堀本 麻由子（東洋大学）

報告2：二ノ宮 リム さち（東海大学）

報告3：藤枝 聡（立教大学）

報告4：飯田 陽一郎（國學院大學神道文化学部1年）

根本 奎（立正大学文学部1年）

松坂 風亜（中央大学文学部1年）

報告5：田島 史織（東京大学教育学部4年）

大学初年次教育においてはこれまで、育成される学生像を示すものとして「社会力」や「社会人基礎力」といった概念が広く用いられ、高校から大学へのトランジションが推進されてきた。加えて、成人年齢の引き下げを受けて、大学初年次教育における消費者教育の重要性も言われている。しかし、社会経済的主体としての学生あり方に即した大学教育の改革が強調される一方で、政治や社会に参与する政治的主体としての学生のあり方に即した大学教育の試みはいまだ十分とは言えない。選挙権年齢が18歳以上に引き下げられた2016年以降、高校3年生の投票率が相対的に向上した反面、高校卒業後の投票率が著しく下がっていることも、こうした大学教育の状況と無関係ではないだろう。すべての学生が「成人」として大学に入学することとなった今、政治的主体としての学生に大学教育はいかに応答するのか、改めて問い直されるべき時期をむかえている。

そこで本コロキウムでは、学生の政治的主体性（エージェンシー）に重きを置いた大学初年次教育の先駆的な取り組みを取り上げ、その思想的背景を明らかにするとともに、ポスト・コロナの時代における大学教育のあり方について議論を深めたい。とりわけ、大学という場所に人々が集まり、集合的相互行為（ジュディス・バトラーやネグリ、ハートのいう「アセンブリ」）がなされることにはいかなる政治的可能性が見出されるのかを、思想史的方法をふまえつつ検討する。

なお、本コロキウムは会場にて対面形式で報告と議論を行うとともに、Zoomによるオンライン（同時双方向型）での参加者とのセッションも実施する。

コロキウム 4 9:00-11:30 Z26 教室
(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

記憶の空間を生きる

——「二重のまち」から考える再表象の実践——

企画者：山名 淳（東京大学）

司会者：室井 麗子（岩手大学）

報告者：瀬尾 夏美（アーティスト、フィールドワーカー）

梶原 千恵（九州大学大学院）・平田 仁胤（岡山大学）

楢桁 祐哉（東京大学大学院）・庭田 杏樹（東京大学学部）

本コロキウムの起点はアーティスト瀬尾夏美氏の著作『二重のまち／交代地のうた』（書肆侃侃房、2021年）およびドキュメンタリー映画『二重のまち／交代地のうたを編む』（小森はるか＋瀬尾夏美監督、2019年）である。瀬尾氏は東日本大震災のボランティア活動を切っ掛けとして2012年から3年間、「岩手県陸前高田市で暮らしながら、対話の場づくりや作品制作」を行い、その後も「“語れなさ”をテーマに各地を旅し、物語を書いている」（同上書の著者紹介より）。

瀬尾氏の作品は、私たちが今・ここの空間を生きているだけではない、ということであらためて思い起こさせる。「災前」の風景が「災時」に失われ、それでも記憶の痕跡が残されていたはずの「災後」の空間もまた嵩上げによって変化を余儀なくされていく。瀬尾氏は「旅人」としてそのように記憶のなかで折り重なっている空間の想起と忘却の間にある人びとの佇まいや言葉にふれ、さまざまな「語れなさ」を自覚しながら、その土地と人びととの関わり合いのなかで何らかの表現が生み出されていく営みに手を添えている。そこで共同構築される表現は過去の記録であると同時に、未来に向けた物語（ナラティブ）でもあるような何ものかである。その過程は作品を生み出すだけでなく、それ自体が作品の大切な一部分でさえある。

瀬尾氏の試みが私たちにとっても興味深いのは、「災後」の人びと（瀬尾氏の言う「旅人」も含まれる）による「再表象（re-representation）」の可能性に触れていると思われるからだ。証言や人びとの佇まいを表象（再提示、representation）と呼ぶとすれば、それらに接触することで生み出されるものは表象をもとにした表象（再-再提示 re-representation）としての側面を有している。表象と再表象との揺らぎとの関係で〈伝承〉とは何かということ、他の表現活動の具体例も交えて考えてみたい。

教育実践をめぐる「遊び」概念の検討

——教育実践における造形遊び・体育科ダンス・ビデオゲームの思想に触れる——

提題者：日向 悠太（立教大学・院生）

司会者：井谷 信彦（武庫川女子大学）

報告者：菊地 虹（立教大学・院生）

北村 桜（立教大学・院生）

日向 悠太（立教大学・院生）

「遊び」概念は教育思想史研究の上では、近代教育思想・システムの目的合理性の突破口のひとつとして知られてきた。そこには目的合理的思考としての「仕事」と行為自体を目的とする純粋な目的としての「遊び」を対立させるという線引きが見られる。それに対して古屋（2021）はG.H.ミードのプレイゲームの思想の解釈を通じて、「遊び」と「仕事」の連続性を、遊びが仕事に還元されるのとは異なる形で提示した。これは本学会の当初から問われていた「遊び」と「作業」の極端な分離に対する懸念（矢野 1992 など）に応答するものであった（西本 2021）。

しかし、上記のような「遊び」と「仕事」の連続性の回復の先に待っているのはなんだろうか。例えば今村（1988）が考えた様に、「仕事」を遊戯性の伴う活動へと転換してゆくという主張であろうか。だがそこに待っているのは、「仕事」を単なる「労働」と遊戯性の「遊び」へと切り分けるという、別の二分法に他ならない。必要なのは、遊びを、仕事概念とは別の参照軸をもって問うという観点である。本発表では「遊び」と呼ばれている諸活動が教育学・教育実践の中でどのように位置づけられ、語られてきたのかという実践の思想を探究することで、「遊び」の教育思想史研究に新たな議論の方向性を提案したい。

コロキウム 6 9:00-11:30 Z29 教室
(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

資本主義でも社会主義でもない社会構想と教育

——シュタイナー「社会有機体三分節化」論のインパクト——

企画者・報告者：奥本 陽子（甲子園大学）

河野 桃子（日本大学）

西村 拓生（立命館大学）

司会者：西村 拓生

指定討論者：佐藤 雅史（横浜シュタイナー学園）

吉田 敦彦（大阪公立大学）

ルドルフ・シュタイナーが1919年に最初の自由ヴァルドルフ学校を創設した際、それが彼の社会構想である「社会有機体三分節化」の一環であったことは、未だその学校の存在ほどには知られていないかもしれない。社会の中で人間が人間らしく生きるために不可欠な三つの契機——精神の自由、法・国家の下での平等、そして経済における需要と供給のコーディネーション——がそれぞれに自律的であることを求めるこの思想は、既に100年前に資本主義と社会主義の双方の隘路を先見したシュタイナーによる、大胆なオルタナティブ社会構想であった。

この構想を理解することはヴァルドルフ教育を理解するためにも実は不可欠であるが、あいにくシュタイナーの思想の中でも特に難解とされる部分の一つであり、研究者の間でも解釈が分かれがちである。ここではまず、シュタイナーが当時のどのような社会状況への応答としてそれを構想したのか、それが現実の社会に対する——けっして形而上学ではなく、ゲーテ的な意味での——観察に基づいているのか、そして自由ヴァルドルフ学校の運営にどのように反映されるべきなのか、といった視点から、この構想の理解にアプローチしたい。

その上で本コロキウムでは、さらにヴァルドルフ教育研究の枠組みを超えて、このオルタナティブな社会構想が私たちの一般的な教育の自明性を根底から揺さぶる可能性について提起してみたい。たとえば——私たちの社会では、学校教育は公的に維持されると共に民主的・政治的に統制されるべきと考えられている。しかしシュタイナーの立場では、「精神」の領域の事柄である教育を「法・国家」の原理によって統制することは、芸術作品の美的価値を民主的に討議するのと同じくらい不条理である、ということになる。——このようにシュタイナーの「社会有機体三分節化」論は、私たちの教育の公共性論や学校論、教師論などにラディカルな問い直しを迫るものでもある。そのインパクトを展望してみたい。

京都学派教育学の〈亀裂〉

——木村素衛と森昭、あるいは形式的表現と政治的実践の対立の根底——

報告者：川上 英明（山梨学院短期大学）

司会者：神代 健彦（京都教育大学）

本報告では、森昭（1915-1976）が晩年に詠んだ短歌「形而下と形而上とのいや深き／亀裂に我は心なゆるか」に見られる、形而下と形而上との〈亀裂〉というモチーフを、「京都学派教育学」の内側に見出すことを試みる。近年の京都学派の哲学と教育学の関係に関する思想史研究では、「国家」という論点をめぐり、木村素衛（1895-1946）の国民教育論が俎上に載せられている。本報告では、木村の『国家に於ける文化と教育』に対する森の批判に着目し、両者の対立が、「形式的表現」と「政治的実践」の対立であったことについて、彼らの思想の背景に想定される、西田哲学と田邊哲学の——特に「行為的直観」と「行為的自覚」の——対立と重ね合わせて検討する。

本報告では、まず、『国家に於ける文化と教育』に対する森の書評を取り上げ、そこでの論点が、形式的表現と政治的実践の対立や、木村の教育思想の生命論的傾向（「国家的生命」の問題）にあったことを明らかにする。次に、木村における実践や行為の含意を、彼の「ポイエシス＝プラクシス」原理の検討を通して分析し、その西田哲学からの影響に着目し、木村の生命論的傾向の思想的背景を解明する。これに対して、森は、書評の翌年に刊行した『教育理想の哲学的探求』などにおいて、教育と政治の関係を考察しつつ、政治的実践について論じていた。本報告では、当時の森の立場が木村を批判させる要因であったこととともに、森が、西田の行為的直観を批判した田邊の行為的自覚の系譜に位置することこそ、その批判の背景であったことを論証する。

だが、本報告は、木村と森の対立の根底に、京都学派の思想圏という共通性をも見て取ろうとするものである。根底を同じくする対立という意味での両者の〈亀裂〉を見出し、そこから生まれ出た諸々の教育思想のゆくえ——森の「教育人間学」や、「戦後教育学」を含む——を描き出す思想史という展望が、本報告の示唆する可能性となるだろう。

近代仏教と教育

——信仰・修養・教養——

報告者：碧海 寿広（武蔵野大学、非会員）

渡辺 哲男（立教大学）

眞壁 宏幹（慶應義塾大学）

司会者：室井 麗子（岩手大学）

河野 桃子（日本大学）

【企画趣旨】

眞壁と渡辺は教育思想史学会で3回にわたって「近代仏教と教育に関する学説史的研究」と題するコロキウムを企画してきた。それは、明治以来、近代教育（学）の確立や発展、改革の試みの背景に近代仏教（浄土真宗、日蓮主義、禅宗など）に関わる人々の思想的影響があったにもかかわらず、数少ない事例をのぞいて本格的組織的研究がなされてこなかったからである。本シンポジウムでは、コロキウムや科
研研究会などを通して積み重ねてきた宗教史、歴史社会学、宗教哲学の研究者との研究交流に基づきながら、「人格」「修養」「教養」の問題に焦点をあて「近代仏教と教育」の関係を考察する。その上で今この問題を思想史的に論じる意義がどこにあるのかについても考えてみたい。

発表者の碧海寿広氏は近代仏教研究の最先端でもっとも精力的に研究を展開している宗教史・歴史社会学の研究者である。発表では、近代日本を代表する仏教学者であり、武蔵野女子学院（武蔵野大学の前身）の創設者である高楠順次郎（1866-1945）が取り上げられる。高楠は仏教思想を背景とした独自の人格主義的教育論を展開した。その教育思想の内実と成立背景が検討される。近代日本において、「人格」をキーワードに仏教思想を語った人物は少なくない。そうしたなか、高楠は国際的仏教学者としての活動を背景に独創的な人格教育論を提示した。特に大きな背景として指摘できるのが、1. 西洋発の近代仏教学のブッダ観、2. キリスト教への対抗、3. 英国の教育事情である。これらの諸要素を踏まえながら、高楠の教育思想を近代仏教史上に位置づけることを試みる。

渡辺哲男会員は、「随意選題綴方」を説いたことで知られる芦田恵之助（1873-1951）を同時代の「修養」をめぐる動向に位置づける。芦田が岡田虎二郎（1872-1920）に静坐を学んだことは知られているが、本報告では、さらに広い視野から、この時期に「日本心靈学会」（人文書院の前身）や「日本精神医学会」などが設立され、『教育時論』誌上でも「催眠術」に関する論稿に一定の反響があったこと、また、岡田の系譜にあたる治療者らに真宗の人びとが接近していた事実などを踏まえ、「科学」と「仏教」のはざまに精神療法的営為が成立したという歴史的文脈のなかで芦田を捉え直してみたい。

眞壁は、ペスタロッチ研究者であり西洋の哲学・教育学に深く影響を受けた教育学者、福島政雄（1889-1976）を取り上げる。福島は、実は、東京帝大生の時に浄土真宗大谷派の僧侶、近角常観が主催する求

道学舎で真宗の教えに出会い、絶対他力の信仰に基づく教養論を刊行してもいる。本発表では、福島政雄の絶対他力の信仰に立つ教育思想と教養論を考察する。そこで問題になってくるのは、真宗の他力信仰に教育現実を批判的に見ることを可能にするような「否定性」の契機を見出しながら、なぜ当時の国体論や皇国史観に依拠した教育学・思想を展開してしまったのかという問いである。生命の平等を主張する仏教思想の影響を受けた少なくない教育者や教育学者も同様なのだが、ここには「時局的」という言葉で片付けられない問題がある。1930年代の宗教の可能性と限界に関する議論を参照しながらこの問題を考える。

近代仏教が学校教育、教師や青少年少女の人間形成に思想的影響を及ぼす場合、具体的には人格主義教育、修養論、教養論などの形をとっていたが、本シンポジウムではその内実を個々の事例に即して明らかにする。すなわち、碧海は高楠順次郎を取り上げながら人格主義教育の問題を、渡辺は芦田恵之助や岡田虎二郎を取り上げながら修養の問題を、眞壁は福島政雄を取り上げながら教養の問題を考察することになる。

司会は、近代化とスピリチュアリティの関係に詳しい室井麗子会員とシュタイナーの人智学や教育を専門とする河野桃子会員である。両氏とも仏教と教育の関係を専門としていないが、狭く専門的になる恐れのある議論を近代社会における宗教と教育の問題へ広げてくれるだろう。



教育思想史学会
第 33 回大会 大会プログラム
2023 年 7 月 31 日発行
教育思想史学会事務局編集